

増田先生を送る

脇 田 宏 (地殻化学実験施設)

増田先生はたいへん豊富な経歴をたどられた方である。ご出身は北国の弘前市である。昭和28年3月、東京大学理学部化学科を卒業と同時に、大学院は名古屋大学の地球化学を選ばれて、修士、博士課程を修了された。名古屋大学には日本で最初に地球科学科が設置され、先生が卒業された年に大学院も開設されたのである。

昭和33年、東京大学理学部化学教室に戻られ、無機化学研究室の助手を務められた。昭和37年には東京大学原子核研究所に移られ、7年間を原子核物理学者の中で過され、御自身で質量分析の装置を組み立てながら地球化学の研究を続けておられた。昭和41年から1年間、米国に留学された。折しも、宇宙探査時代の幕開けで、留学先はワシントン近郊NASAの中心的研究機関Goddard Space Flight Centerであった。

昭和44年秋には、東京理科大学理学部化学科に助教授として迎えられ、独立した研究室を構えられた。手狭な研究室には大勢の学生が溢れ、廊下や階段までも実験室にして、研究をすすめておられた。その頃、学会では自信に満ちた学生さんたちが理科大の名をとどろかしていた。

昭和49年には、新設された神戸大学理学部地球科学教室の地球化学講座担当の教授として赴任された。7年間を関西の地で過ごされた後、昭和56年、再び東京大学理学部に戻られ、教授として地球化学の研究や教育に尽くされ、本年ご停年を迎えられる。

先生の御研究の内容はご経歴と同じように非常に多彩である。その中心は稀土類元素の存在度で、宇宙や地球の起源、進化に関する地球化学的研究である。稀土類元素は化学的性質のよく似た十数個の元素の総称で、増田先生は世界ではじめて地

球化学的システマティックスを提唱された。さらに高精度質量分析計による存在度の精密測定など独創的な研究成果も次々と発表され、周辺領域にも大きな衝撃を与えている。こうした研究の成果が認められて、昭和58年には「稀土類元素の微量精密測定と宇宙・地球科学への応用」の題目で仁科賞を受賞された。

最近では、天然放射性的の La_{-138} のもつ半減期を利用した新しい年代測定法を実用化するなど、世界に大きな反響を与えている。稀土類のご研究のほか、地球環境に密接に関連する砂漠化の問題にも関心をもたれ、ご自身で何回も中国奥地の砂漠に出向かれている。

先生は本学に在職中、学部内はもとより学内の各種委員会委員を歴任され、学術行政にも尽くされた。おもなものは理学系研究科委員、化学専門課程主任、環境安全センター運営委員、留学生教育センター運営委員などで、理学部分光化学センター長の要職も歴任された。学外でも、科学技術会議専門委員、学術審議会専門委員、国立極地研究所南極隕石研究委員会委員、科学技術庁研究開発局研究推進委員会委員などの要職を務められた。さらに、近年では、理化学研究所地球科学研究室の主任研究員も兼任され、多数の研究者を指導されておられる。

先生は日本地球化学会の会長、副会長、学術会議の研連委員長などを務められるなど、学会活動も熱心に続けておられる。多年、日本地球化学会誌「Geochemical Journal」の編集長として、世界的に評価のある雑誌に育てあげられたのも先生のご努力である。

これでは、超多忙となるのは当然で、ご帰宅はたいがい終電車ということである。先生の研究室

には中国・韓国・イランなど世界の国々から先生を慕う留学生が集まっていることでも有名である。

先生のお人柄についてふれる余地がなくなった。優しい奥様とお嬢様方に囲まれたご家庭と伺っている。先生も一見やさしそうであるが、科学研究

費特別推進研究を2度も獲得されたことからわかるように、信念と説得力をもった方である。

本年4月からは電気通信大学でご活躍なさることが決まっている。先生、今後もお元気で研究を続けて下さい。